



淫墮の姫騎士

THE PRINCESS KNIGHT "JANNE"

ジャンヌ

美姫転生

小説 筑摩十幸 挿絵 木ノ崎由貴

原作 桜沢大

立ち読み版

第一章	伝説の姫騎士
第二章	悪魔の強制受胎
第三章	母と娘・淫らなる狂艶
第四章	魔悦に蝕まれる母聖
第五章	出産披露宴・王女から牝へ

登場人物紹介

Characters



ジャンヌ・フィリエール

かつてのギドーとの戦いのあと、人間界に転生したリブファールの王女。前世の記憶を失い、普通の子供として生活していたが…。



あずま

東ミハル

ジャンヌの親友で学園の生徒会長。ジャンヌとともに人間界からリブファールへ召喚される際、オーガに囚われ…。



エリーヌ・^{かむい}神居・ フィリエール

人間界でのジャンヌの母親。おっとりとした性格だが、誰よりも娘思いである。



ユーワ・グルノーブル

リブファールの王女で、かつてのジャンヌの妹。王国を守るためジャンヌを呼び寄せる。



アナスタシア

ギドーに協力する謎のゴスロリ少女。ジャンヌを淫魔に改造するため暗躍する。

ギドー

オーガの王。かつてジャンヌに倒されたが、復活し再び彼女を我が物にしようと狙う。

城嶋

ジャンヌが通う聖ルミナス学園の、担任である若い男性教師。



これまでのあらすじ

リプファール国の若き王女ジャンヌ・グルノーブル。天使の血をひくといわれる彼女は、白き翼を身にまとい、祖国を守る姫騎士であった。

——突如リプファールを襲うオーガの一団。ジャンヌは国民を守るため、オーガの王ギドーへと立ち向かうが、その隙に、幼い妹ユージュをさらわれてしまう。ギドーはユージュを人質に、ジャンヌを自分の奴隷に堕とすべく迫るのだった。

度重なる調教の果てギドーの子種を孕まされる姫騎士ジャンヌは、ついに国民の前へと引き出され、ギドーの花嫁になることを宣言させられてしまう。

しかしその時、絶望する国民の前で、ジャンヌの身体に眠る天使の血が目覚めた。

背中に翼をまとい天使の力に覚醒した姫騎士ジャンヌ。

彼女がギドーを打ち倒す時、その魂は天へと消えていくのだった。

——その後遙かな時空を隔ててジャンヌの魂は現代に転生し、ごく普通の少女として平穏な日々を過ごしていた。

だが、その一方でギドーの魂もまた、蘇ろうとしていた。深き因縁で結ばれた二つの運命が、異世界で再び交錯する……。

「ンふふ。もうすぐジャンヌはギドー様の望まれる貪欲で変態な牝淫魔になるんだよ。それが伝説の真相、あなたの前世の本当の姿なんだって」

「あうう……ち、ちがいますわ……わたくしは……ハアハア……そんな女じゃありませんわっ！」

「強がっちゃって。素直になりなさいよ」

ミハルのしなやかな指が、スカートの奥に忍び込む。金髪ヘアに飾られたワレメを縦になぞると、ヌルリと湿った感触が粘った。

「やっぱり、もうグチヨグチヨじゃん。おっぱいぶたれてオマンコ濡らすなんて、今すぐギドー様に抱かれないんじゃないの？ もう淫魔ウィルスが全身に拡がっているんだから、あんまり我慢していると頭が変になっちゃうよ」

ラビアを左右にくつろげながら神聖な処女孔を浅く抉る。刺激が処女膜を貫通して秘奥にも伝わり、得体の知れない衝動が未開の粘膜を炙り始める。

「ううあ……ハアハア……そ、そんなわけないでしょっ！ わたくしは……うう……まだ正気よっ！」

「気丈に言い返すジャンヌだが、それを見てミハルは憐れみすら感じるような眼差しで睨にらめる。

「がんばるね、ジャンヌ。でもね、それこそがウィルスが定着しちゃった証拠なんだよ」
「……ど、どういうことですか？」

「一週間もぶつ続けて、何百回とイキまくったのに正気だなんておかしいと思わない？ フフフ。つまりジャンヌはどんな激しい責めにも堪えられる、いやらしい淫魔の身体になりつつあるんだよ」

「わ、わたくしの身体が……い、淫魔に……いや、そんなのいやよっ！ あううっ」

軽くワレメを擦られるだけで、子宮を甘噛みされているような快美感に襲われる。ガクガクと腰が震え、絶望感すら乗り越えてもつと触ってくれと言わんばかりに持ち上がってしまう。

「すっかりとろけちゃって。ウフフ。私ももう我慢できなくなっちゃった」

頬をセクシーに紅潮させたミハルは一旦身を起こすと、ボディスーツの下穿きをずらした。

「ハアハア……ミハル……あ、あ……ああっ!!」

そこにあるモノを見てジャンヌは目を見開いた。

濃い紫色をした蛇の頭のような不気味なモノが、ミハルの股間からヌツと生えているではないか。

「ンふ、ふふううっ……ジャンヌ、よく見て……はあ、はあ……私を見てえ……はああ、はああん」

ゴツゴツと節くれ立ち、妖しげな粘液に濡れ光っている異形の棒を、シュツシュツと擦りながらミハルが微笑む。感覚も繋がっているらしく、ミハルの表情には恍惚が浮かんで

いる。

「な……なんですの……ミハル……そ、それは……」

不気味な剛棒から伝わる邪気に、ジャンヌはゾッと寒気を覚えた。

見たことはない。だがジャンヌの中の記憶が『それ』を知っている気がした。前世において、エンジェルキラー以上にジャンヌを苦しめ、絶望と淫虐と肉悦のどん底に叩き落とした最凶の魔物があつた。それと同じ匂いをジャンヌは感じとつたのだ。

「ウフフ。思い出した、ジャンヌ？ これは『子宮寄生体』の産卵管だよ」

「し、子宮……寄生体……ですって……？」

その名を聞いただけで顔からサアッと血の気が引き、いやな汗が毛穴から噴き出した。その一方で下腹部がキュンッと熱く疼く。

九十九%の恐怖の中に得体の知れない1%が混じり込む。混乱が深まり、自分がどうなっているのかもわからなくなってくる。

「そうだよ。寄生体はギドー様の赤ちゃんを産めるように、ジャンヌの子宮をオーガ専用の子宮に造り替えてくれるの。ハア、ハア……私は普通の人間だから定着しなかつたけど、その代わり寄生体を育てる苗床にしてみらつたんだ」

ウツトリと眼を細め微笑むミハル。まるで初めて子を授かつた幼妻のような幸福そうな表情だ。

「ハアハア……ジャンヌがこつちの世界に来るまで、半年間……私のお腹で大切に育てて

きたんだよ……もう自分の子供も同然に可愛いの……あはぁん」

「ずっと……コレを……ジャンヌの中に挿入されたの……ああ……ジャンヌの中にい、いっぱいいっぱい卵を産んでみたかったのおっ」

愛おしげにお腹を撫で、剛棒をしごき上げる。そう言われればミハルのお腹は少し膨らんでいるようにも見えた。

「う、うそ……そんな……ミハルのお腹の中に……き、寄生体がつっ!」

想像しただけで全身の血が凍りつく。愛すべき親友は墮天使に墮とされただけでなく、忌むべき魔物の宿主にされていたのだ。そして今、寄生体は産卵期を迎えているのだった。「はあはあ……前世のジャンヌは国民の前でポテ腹晒して、出産までしたんでしょ。ああ、私も見たいなあ、ジャンヌがギドー様のすっごく大きな赤ちゃんを産むところ……ハアハアッ! だからジャンヌを犯すの……私のオチンポで……ジャンヌの子宮を造り替えてあげるっ」

妄想がミハルの昂奮を掻き立てるのか。産卵管は血管をヒクつかせながら大きく立ち上がり、先端から透明の粘液汁を滴らせている。

「い、いやよっ! ミハル、それだけはやめてっ!! オーガの……ギドーの赤ちゃんを妊娠するなんて……死んでもイヤですわあっ!」

異種族の仔を身籠もるおぞましさは転生しても消えないのか、おぼろげに蘇る記憶が恐怖を増幅させる。だがどんなに必死にもがいても、手足に絡みついた触手はビクともしな

い。

「暴れても無駄だよ。寄生体の卵は一度入ったら二度と取り出せないんだから。ジャンヌはオーガのママになる運命なんだよ」

ミハルが腰を落とし、挿入の体勢に入った。その時――。

「いやっ、いやああああああっ！」

シユバアアアアアア――ッ！

ジャンヌの背中から目映ゆい光の翼が生え、突風のような聖なるオーラがミハルの身体を押し返す。それはあらゆる闇を討ち滅ぼす天使の神聖力の発現に他ならない。

「くっ……やっぱり、まだ力を残していたんだね。さすがジャンヌ。でもね……」

メキメキイッ！ キュバアアアアアアアアッ！

艶やかな黒髪を跳ね上げるようにして二本の暗紫色の光がミハルの背中から伸びる。

「ッ！ ミハル……そ、それは……翼!!」

驚き目を見張るジャンヌの目の前で、ミハルはエナメルのような光沢を持つ黒翼を、自慢げにはためかせてみせた。

「私は堕天使。翼くらい当たり前でしょ」

「くっ……なんて強い……力……ですの」

聖気と闇気とが激しくぶつかり合い、二人の間でバチバチと激しい火花が散った。部屋中の空気が震撼し、頑丈な石壁もミシミシと軋むほどだ。

だが天使と墮天使の相克は、意外なほどあっさりとな勝負がついた。すでにウィルスによる弱体化を受けた今のジャンヌでは、圧倒的なミハルのパワーに抗いきれない。

「アハハハッ。弱い、弱すぎだよ、ジャンヌ！ そんなんだから、誰も救えないんだよ」
黒翼が三つ又の槍のように変形したかと思うと、ジャンヌの黒翼を刺し貫いてベッドに縫いつけ、完全に制圧してしまった。

「ううっ、ミハル……ぐうう……っ」

暗黒のパワーに圧倒され、ジャンヌの黒翼は急速に光を失っていく。完敗したことよりも、親友がここまで悪に染められてしまったことがショックで、ジャンヌは無念そうに呻くばかりだ。

「わかったでしょ。あなたは私に勝てない。諦めて、牝豚天使になろうね」

膣口にあてがわれた産卵管の先端が細く変化し、処女粘膜を掻き分けてゆっくりと侵入を開始した。

「ムフフ。処女膜はギドー様のためにとっておくから安心してね」

「そんなもの入れないでっ……ンあああ……っ！」

ミハルの言うとおり、寄生体の産卵管の先端は細く処女膜を傷つけることなくぐり抜け、さらに奥深くに潜り込んでくる。

「はあああ……これがジャンヌの中……あああ……温かくてヌルヌルして……きもちいい……」

「やめてっ……ああああ……お、奥まで……くる……ハアハア……ふ、深いっ！」
小指ほどの太さの細管だが、処女を拓かれるジャンヌにとつては恐怖以外の何物でもない。まだ誰も触れたことのない聖なる処女粘膜が一枚ずつくつろげられ、押し開かれていく。魂まで串刺しにされるような異様な感覚に身を強張らせて、ジッと堪えるしかなかった。やがて――。

「はああっ……ここがジャンヌの……オマンコの奥……ハアハア、子宮の入り口なんだ」
産卵管は子宮の底にコツンと当たってようやく止まった。

「あ、うああっ……だめ……う、動かないでっ……は、早く抜いて……はあうんっ」

ツンツンと子宮口を突かれて、ジャンヌは恐怖に引き攣る肢体を足掻かせた。しかししつかりと食い込んだ産卵管は抜ける気配もない。

「ハアツハアツ……まだまだ……これからだよ」

クチュツ……クチュルツ……ジュプジュプンツッ！

ミハルが腰をゆつくり円を描くようにグラインドさせると、産卵管もジャンヌの腔内を掻き混ぜるように蠢きながら、子宮口を集中して責めてくる。

「うああ……こ、これ以上……なにを……？」

「はああん……もちろんジャンヌの子宮の中にオチンポ入れるんだよおっ。そこにいっぱい、いっぱい、卵を産みつけちゃうのおっ……あはああんっ」

「ひっ！ そんな……やめて……し、子宮の中なんて……入ってこないでえ！」

ジャンヌの哀訴も、墮天使となった元親友の耳には届かない。

むしろ昂奮した様子で、プリプリしたお尻を振り立ててジャンヌの子宮に産卵管をねじ込んでくる。あたかも寄生体に精神まで乗っ取られてしまったかのように、赤い瞳が凶暴に煌めく。ゼエゼエと荒い呼吸を繰り返す唇からは、涎まで垂れている。

「やめてミハル……うああ、あああ……っ！」

子宮頸管を通り抜け、ついに背徳の産卵管がジャンヌの子宮内へ突入する。痛みはほとんどないが、子宮の最奥に感じる挿入感は相当なもので、とても細い管とは思えない。ミハルに身体のすべてを支配されていくようだ。

「はあおんっ！ 入ったよお、ジャンヌの子宮に……はあっ、はあんっ……繋がつてるのお……ジャンヌと私の子宮があ……つながっちゃったのお……ああ……ヤバイ、これ、すっごく気持ちいいっ！」

ミハルはウットリと微笑みを浮かべ、胎内の感触を堪能していた。産卵管はミハルの子宮から伸びており、牡と牝の快感を同時に感じるができる。

まるで無限の海をたゆたうような浮遊感に、魂が身体から浮き上がりそう。さらに産卵管を食い締める子宮口と膣肉の締めつけがたまらなかった。

「ああ、ジャンヌ……ジャンヌをもっと穢したい……私のオチンポで……ハアハアッ……もっと、身体の奥の奥まで……メチャクチャにしたいっ！」

双眸を淫欲に燃え上がらせ、ミハルはリズムミカルに腰を振り続ける。U字に湾曲した産

卵管を双頭パイプのように使って二人の蜜壺を掻き混ぜ合う。

ジュプッ……ヌプッ……クチュクチュンッ!

しなやかなS字曲線が生み出すウエストラインが二つ、少女とは思えないエロスを振りまきながら、絡み合うようにペアダンスを踊る。

「ああんっ……やめて……ミハル……子宮の中、掻き混ぜないで……うあああっ!」

産卵管が子宮口に入入りするたび、お腹の底から湧き起る強烈な陶醉感が脳をぐらぐらと揺さぶる。

(……な、なんですの……これえ……?)

それはポルチオ性感と呼ばれる最も強い女体の性感帯の一つなのだが、通常はセックス経験を積んだ女性が会得するものであり、処女であるジャンヌにとってはあまりにも強烈すぎる。膣孔に電極を突っ込まれて高圧電流を流されているような凄まじさに、意識まで吹き飛びそうになるのだ。

「やめないよ……はああっ……ジャンヌの中に産むまでえ……ジャンヌを牝に変えるまでえ……絶対やめないんだからあ……あ、ああん……ジャンヌも、もつとオマンコ締めつけて……私を感じてえ」

「うあああ……ミハル……だめえ……な、なに……? お腹の中で……お、大きくなって……っ!!」

その情念が乗り移ったように、子宮内に侵入した産卵管の先端部分が、大きく硬くコブ

のように膨らんでくるではないか。

「あはああんっ……これでもう抜けないよお……ジャンヌの子宮中に卵出すまで抜けないのおっ……ああああ……ジャンヌと私の子宮が繋がってえ……オチンポピンピン感じて……たまらないよっ！」

勃起したことで感度も増したのだろう、ミハルは恍惚の表情を浮かべ、リズミカルに腰を振り続ける。産卵管がうねるたび、連結された二人の子宮が同時に攪拌され、グチュグチュと淫靡な音を響かせた。

「ハアハア……ミハル、正気に戻って……あああ……た、卵なんて産まないで」

「はあっはあっ……ジャンヌの子宮もとろけてきたあ……ンあ、んふっ、あああん……ここがイイ……ここに産むのおっ！ いっぱい産んで、ジャンヌをオーガ様専用の変態淫魔にするのおっ！」

ジュブツ！ グチュルツ！ ズチュンツ！

完全に寄生体の産卵本能に支配されているのだろう。ジャンヌの言葉など耳に届かない様子で、目尻はトロンと下がり、緩んだ唇から舌がはみ出し涎まで垂れている。

「ンああっ……そんな……はげしい……ンああああ……だめえ……くああああんっ！」

体積が増したぶん、一発ごとの威力も倍加していた。ズンズンと杭打ちのような衝撃を子宮に叩き込まれるたび、胎内で快感の爆発が起きて、ジャンヌは顎を突き上げ拘束された身体を仰け反らせた。化け物の卵を産みつけられるなど、おぞましく恐ろしいはずなの

に、肉体は発情させられ、受け入れ準備を整えさせられていく。

「あはあん。ジャンヌも私の卵が欲しくなってきたんじゃない？ はああはああ、ほらほら、子宮がピクピク締めつけてえ……あああん、イイよお」

「ち、ちがう……ああうん……欲しくなんかあ……あ、あああん」

抽送される産卵管から染み出す先走り汁は、一滴で巨象も発情させるほどの強力な催淫媚毒だった。それを直接子宮に注がれては、さすがの天使姫も欲情を抑えられない。粘膜が大量の愛液を溢れさせながら、産卵管を熱く包み込む。数段にもわたって締めつける蠢きは、処女とは思えない淫靡さでミハルに快感を与えた。

「んはあ……締めつけちゃって……可愛いよジャンヌ……好き……はああ……大好きだよお」

「ミハ……んむむっつ！」

昂奮したミハルの顔が急接近する。避ける間もなく、唇を奪われていた。

ぬめる舌が甘い吐息とともに侵入し、ジャンヌの舌を搦め捕る。一見すれば美少女同士のレズビアンだが、その実は強姦に他ならない。

「んちゅっ……むちゅっ！ 好き、ジャンヌ……チュッチュッ……あああん……すきすきっ、らい好き！ ちゅっ、ちゅばあっ！」

貪るような舌遣いで唾液を混ぜ合い、歯茎を舐め回しては顎の裏側をくすぐってくる。粘膜と粘膜を擦り合わせ、互いの体温を交換し合う。

「んふっ……ひやめ……んあ……くちゅ……ちゆるう……あ、ああ……んんっ！」

舌を吸われるとビリビリと甘美な電流が喉奥から延髄に突き抜ける。顎に力が入らなくなり、次第に意識も朦朧としてきた。

(ミハル……)

もともと仲のいい二人だった。そのかけがえない友情までも、淫らな同性愛の情欲に変えられて、悔しさと悲しみがこみ上げる。しかし子宮に愛欲のピストンを撃ち込まれるたび、悲哀すらも淫猥な色で塗り潰されていく。変化はジャンヌにも伝染し、ミハルに犯されて嬉しいという気持ちがあふとこみ上げてくる。

「はああ、はああん……ジャンヌのオマンコも唇も大好きだよ……んあああ……好きだから、メチャクチャにしたいのおっ」

ミハルは一旦唇を離し、そのぶん腰のピストンを強めた。

ズブツ……ジュブツ……ズブズブズブツ！

寄生体の狂った愛に取り憑かれたミハルの動きに容赦はなく、より深くよりしつこく乙女の子宮を責め続ける。しかも単純に突き上げるだけではない。女同士だからこそわかる急所を狙って、ドスンと最奥を抉ったかと思えば、浅く退いて子宮口を裏側からゴリゴリ擦り上げる。倒錯した愛情に子宮の隅から隅まですべてを可愛がられてしまうのだ。

「はあうっ……くうんっ……み……ハル……だめえっ……そんなにされたらあ……あ、あああ、あああああ……んん」

それが偽りの愛情だとわかっていても、淫魔ウィルスに冒された肉体はこの異常な状況にすら淫らに反応してしまう。産卵管に攪拌される子宮から、串刺しにされた処女膜から、肉も骨も、魂までもとろけそうな自堕落な快感が湧き起こってくるのだ。

「ハッハアッ。オマンコだけじゃなくて、子宮でも私のオチンポしゃぶりついて……あふうん……全然放してくれないんだもの……これで処女だなんて……やっぱり、ジャンヌは淫魔の素質十分だよ……はああ、ああ」

膨らんだ亀頭部は温かい子宮内膜に包まれ、溶けてしまいそう。そのすぐ下のカリ首の辺りは子宮口がキツキツに食い締めてくる。そして陰茎全体に、まだ男を知らない処女褻がびつたりと密着し、熱い蜜液をバターのように塗りつけてきた。並の男なら一瞬で射精してしまおうであろう快美の泉に、ミハルは今にでも出してしまいそうな衝動を必死で抑え込む。

「いやよ……淫魔になんてえ……ああ……なりたくない……んんっ！　なりたくないのにい……あ、あああ、ミハル……んんっ、はあ……ミハルのオチンチンが……あ、ああ、ああっ」

これが淫魔ウィルスの影響なのだろう。まだ男も知らない身だというのに、同性の少女に子宮を犯されるという異常な責めに、ジャンヌの女体は淫悦に燃え上がっていた。

一突きごとに哀しくも愛らしい媚声を振りまきながら、ジャンヌの腰がミハルと息を合わせて動き出した。とめどなく蜜を湧かせる処女孔が収縮と弛緩を繰り返し、次第にその



間隔を狭めていく。濡れ輝く粘膜がヒクヒク痙攣しながら産卵管に絡みつ়く様は、寄生体の卵を欲しがっているようだった。

「あ、はあああ……そんなに暴れたら処女膜破れちゃうよ？」

「う、うああんっ……そ、それはだめえ……わたくしにはセンセイが……」

担任の城嶋の優しい笑顔がふと頭を掠めた。元の世界に帰るまで、何としても純潔を守りたい。それは少女としての儂くも純粋な願いだつた。

「私がこんなにしてあげてるのに、城嶋先生のことを言うなんて。牝豚天使のクセに生意気だよ……はああ、出しちゃうんだから……あああ……魔物の卵を、産みつけてやるんだからあつ！」

親友を犯す異形ペニスの中を、嫉妬にも似た獰猛な感情が暴れ回る。

ミハルの官能が昂るにつれ、ビクッビクッと痙攣する産卵管の中を、成熟した赤い卵が一つまた一つと這い上がっていく。間近に迫つた産卵への切迫感が、激しい血流となつてフタナリ勃起に流れ込み、龟头部をドクンドクンと脈動させた。

「あああ……陣痛きてる……はああ……もう……産まれそうなお……はっはあつ、ふううん」

美貌を上気させ息み始めるミハル。下半身に力を込めて、テンポのいい呼吸を繰り返す様はまさに妊婦のようだ。

「はああああ……いやいや……ミハル……だ、出さないで……わたくしの中に……う、産

まないでっ……ンあ、ああっ……それだけは許してえっ」

子宮内で産卵管がさらに熱く膨らむのを感じとり、ジャンヌは絶望の悲鳴を上げる。それは天使の姫にとつて死刑宣告と言つていい。しかし手足を触手に拘束され、翼の力も封じ込まれた天使の姫に逃れる術はなかった。

「はあ、はあっ！ いいよ、その顔……ああん、昂奮しちゃう。もつともつと嫌がつて……ンああああ……もつと泣きなさいよお、アハハハッ」

部活で鍛えたしなやかな筋肉が、鋭い突きを子宮にズンズンと食い込ませる。早馬を駆るような腰つきで、処刑のカウントダウンを刻むのだ。

「ああっ……だめ、だめえ……もう……だめえ」

子宮まで突き抜ける衝撃と、肉も魂もドロドロに溶かされるような快楽責めにジャンヌは目を剥いて仰け反り、ヒィヒィと顎を裏返らせることしかできない。それにつれて腰もブリッジするように反り返り、濡れた蜜肉は淫棒をさらに奥へ奥へと呑み込もうとするように蠢いた。

「はっはっ、はあっ……いくよお、ジャンヌウ……んんっ……ジャンヌのオマンコに……ああっ……出すのおっ！ 産卵するのおおっ……っ！」

狂つたように腰を振るミハルの渾身の一撃が、処女褌も子宮口も押し広げ、子宮の最も奥深いところで爆ぜる。

ドビュッ！ ドビュウッ！ ブッシヤアアアアアアアッ！

その直後、ジャンヌのお腹の紋様がさらに大きくなり、お臍の周りをぐるりと取り囲んで赤々と輝き始めた。それを見たオーガの間にどよめきが起こる。

「うああ……こ、これは……？」

「契約の呪力により、『強制受胎の印』が発動したのじゃ。フフフ、これでそなたは確実に妊娠する」

「妊……娠……ああ……ン」

その言葉の響きだけで蜜鬢がジュワアツと濡れる。子宮が、卵巣が熱く疼き出し、猛烈にザーメンが欲しくなる。淫魔の吸精本能と妊娠願望とが混ざり合い、一本の熱流となつて全身を駆け巡る。たとえ淫魔の本能に理性を混乱させられての行為であっても、契約は忠実に効果を發揮していた。

「おら、妊娠したいんだろ。もつと腰を振れ」

「ンああ……は、はいい……ギドー様あ……はあう、……イイ……ズンズン響きますわあ……子宮が孕みたがってますのお……はああ、ふうあ、ああくく〜んっ！」

ジュツポツ！ ジュポオツ！ ゲチュルルツ！ ジュブジュブジュブウツ！

金髪を振り乱し、がに股開きの太腿を屈伸させて、自らを串刺しにするジャンヌ。双乳がゴム鞠のように上下に弾み、汗と愛液の滴が飛び散る。

「オオオオ……すげえぞ……これが本気の淫魔のオマンコか……ハア、ハア……絡みついて……吸いついて……魂まで引き込まれそうだぜえ……くうう、これほどとは……ジャン

ヌ！ やっぱりお前は……ハアハアッ！ 最高の牝だっ！」

媚粘膜が勃起ペニスにピッタリと密着し、まるで鑄型に嵌め込んだような一体感がギドーを包み込む。血管も神経も繋がってしまったのではないかと思うほどの、凄まじい快感だった。

「今日こそ、孕ませてやるぞっ！ うらああっ！」

剛腕で細くくびれた腰を抱き、さらにジャンヌの身体を下方に引き落とした。

「あひいっ！ ひっ、ひぎいっ！ うあああ~~~~~んっ！」

ギチッギチッと子宮の底に全体重が集中し、食い込んだ衝撃が頭頂にまで突き抜ける。最大の性感帯であるポルチオを直撃されて、スレンダーな身体が弓なりに反った。

「まだまだああっ！！」

それでもギドーはまだ満足せず、さらに深く肉槍をねじ込もうとする。

「う、あ……あああ……ふ、深い……お、おおっ……もう当たってる……ンおっ……

もうそれ以上は無理い……ふあ、ああ~~~~~ん！」

限界だと思った瞬間、それまですべては収まりきれなかった超巨根がズブズブとジャンヌの中に沈み始めたではないか。

「ひいあああ……な、なに……中が……あうう、はあうん、くうあああ……お腹の中があ……はひいっ……開いちやうう……ンあおお……開くう……ああああン」

開かれた身体の奥をさらに開かれていく。かつて感じたことのない感覚に、朱唇は涎を

垂らして開ききり、牝獣のような咆哮が迸った。

「ふっはあああつ！ オーガの牝は子宮で交尾するんだよおっ！ グフフツ！ 俺の嫁になるなら、これくらいできねえとなあつ！ うりやあああつ！」

「ひいっ！ し、子宮があ……ひ、ひらく……開かれちゃう……あひいひいひいんっ！」

神秘なる生命の扉が、邪悪な獣棒によって拡張され、くつろげられてゆく。普通なら激痛を感じるだろうが、淫魔の本能が覚醒したジャンヌにとつては、この世のモノとは思えない法悦だった。ズンズンと子宮口を突かれるたび、手も足も内臓も骨格も、すべて余分な部分が削ぎ落とされ、子宮だけの存在にされていくようだった。

「うらああああつ！ くらえええつ！」

ズブズブズブツ！ ジュブンンツツ！

「んっはあ……は、入ってえ……ンあああ——ツツツ!!」

ついに子宮口をくぐり抜けて、亀頭がジャンヌの最深部、子宮内に侵入した。衝撃で仰け反るお腹の紋様の中心部が、ポッコリと盛り上がる。

「ギドー様のデカマラが根元まで全部入っちゃまった」

「オーガ流のセックス、子宮姦だぜ。まさか人間の身体であれを受け入れるとは、たいしたもんだ。さすがジャンヌだぜ」

壮絶な子宮貫通を見せつけられ、オーガ兵は欲情で血走った視線を元王女に向ける。ここまできたら、最後まで見届けなければ収まりがつかない。

「グハハハッ！ これで子宮の処女も俺様がいただいたぜえ。どうだあ、ジャンヌ、嬉し
いか？」

極太のかりでドーナツ状の子宮口をコリコリと擦るギドー。オーガ族では子宮セックスも普通の行為だが、それを人間の女で、しかもとびきりの美少女で味わえるのだから最高の気分だった。

「ハアハアア……ギドー様……し、子宮の処女を……奪っていただき……あ、ありがとう……ごじますう……ンはああ……と、とっても……し、子宮が……悦んできますう……あうううんっ！」

(こ、こんなに……す……すごいなんてえ……つつ)

女の命をダイレクトに犯される喜びがさざ波のように拡がって、全身の神経をビリビリと感電させる。甘美な静電気を帯びた赤血球が、身体中の血管の中を暴れ回る。子宮にこれほどの快樂ポイントが潜んでいたなんて、驚くばかりだ。

(ああ……子宮まで……ギドーのモノにされて……わたくし、もう……)

女にとって最も大切なところを肉棒で征服されたという事実が、ギドーへの隷従の鎖となってジャンヌの身も心も縛っていく。

「はああああん……わたくし……ギドー様の……ど、奴隷妻に……なれて……ああん……し、幸せですわあ……あつ、ああん」

ギドーの膝の上で腰を上下に揺すり、子宮を食虫花のように蠢かせて剛棒を根元まで吞

み込もうとする。

ジュボツ！　ギユボオツ！　ジュツボツ！　ジュツポオ！　グチュルルツ！

「んはあつ……あああつ……し、子宮口が、オチンポおしやぶりしてますのお……はひいんっ！　子宮がオチンポくわえてえ……あああん……チュパチュパしてますわあ……はあ、あああおんっ！」

神聖なる子宮までもが淫魔の吸精器官となり、亀頭を包み込んで下品に、熱烈にバキュームする。

「オオツ……こ、こいつはすげええ」

子宮口にきつくカリをしごかれながら、亀頭を熱い子宮内膜にしやぶり尽くされる。セックスとフェラチオを同時に味わっているような濃密なふしだらな快樂が、百戦錬磨のギドーさえも唸らせる。

「ああんっ！　ああんっ！　気持ちいいっ……オマンコがギドー様のザーメン、欲しがってますわ……はああっ！　ああうんっ！　子宮が……孕みたがってますのおっ……あつ、ああうん、イイ……もつと、もつと突きまくってください……はああうん」

「よがってるだけじゃダメだぞ。ハアハア、マンコと子宮で、俺のチンポの味をよく覚えるんだ。俺から一生離れられなくてやるっ！　オオウツ！」

「ああんっ！　はいい……覚えますう……ギドー様のオチンポの……はああ……深さも硬さもお……あ、あああうんっ……熱さも形もお……カリの出っ張りもイボイボの数

もお……ああああんっ……全部、子宮とオマンコで……お、覚えますわあ……あん、ああん、はああうんっ！」

媚肉と子宮口を思いきり締めつけて、ギドールの巨根の形をしっかりと我が身に刻み込むジャンヌ。グチュルルツと蜜液を噴き出しながら密着した粘膜が、ペニスの起伏に合わせて徐々に形を変えていくのが自分でもわかった。

「はあああ……だんだん……お、覚えてきましたわあ……オマンコも、子宮もお……ギドール様のオチンポの形になってきましたわあ……ああんっ！」

「ウオオッ……本当に形が変わって……ますますピツタリ吸いついてきやがった。グフフ。たまらねえ、もつともつと犯して、俺好みの牝に仕込んでやるからなあ」

もともと名器だった隆洞だけでなく、神聖なる生殖器官であるハズの子宮や卵巣までもが、ギドールの肉棒に奉仕するための淫肉玩具へと躰けられていく。身体の内側から、ギドールの好みの色に染め上げられていくのだ。

「あああっ……はい、ギドール様……もつとジャンヌをオチンポで躰けて……あはああんっ……ギドール様のお好みのオマンコにしてください」

逞しい肉棒で子宮をズーンと突き上げられるたび、身体全体が浮き上がり、揺さぶられる乳房まで感じてしまう。強大な牝に支配される幸福感で、骨の髄までメロメロにされていく。

（あああ……からだが燃えてえ……頭が変になるう……もう、幸せすぎて……何も考えら

れませんわあ)

力任せのピストンだけでなく、ギドーは巧みなテクニクも織り交ぜて責めてくる。子宮口に肉の傘を引っかけるようにして抉られると、ツーンツーンと快美の矢が身体の奥深くに突き刺さる。肉イボに擦られるカズノコ天井は快美な電流がずっと張りついたまま、アクメ寸前の法悦にくすぐられ続けている。

「グッフフ。どんな気持ちか、部下どもにも教えてやれ」

「はいい……オ、オーガの皆さん、見てください……ギドー様の子宮セックス、とつてもイイの……ジャンヌのオマンコも子宮口も、いやらしい淫魔に変態改造されてえ……ああ、もう普通の男じゃ満足できませんわあ……ンはああんっ！」

「ああああん……もうリブファールのことなんて……どうでもいいのおっ！ あああんっ！ ジャンヌにとつてチンポが一番大事……もう、このチンポなしでは生きていけませんわあ……あはあんっ！」

肉悦にとろけきつた美貌に、淫蕩な笑みが浮かぶ。変身こそしていないが、淫魔の魔性が溢れ出してオーガたちを虜にする。

「はあ、ああん！ こ、こんな風に、子宮でオーガ様と交尾できる人間は、この世でわたくしだけですわあ……あああんっ！ 幸せ……幸せなのおっ！」

さらに腰を持ち上げて、深く結合した部位をこれ見よがしに見せつける。濃厚な性臭が湯気とともにムンムンと立ち上り、観る者をいっそう引き寄せた。

「くう、見せつけやがる。今年の祭りは最高だな」

「あんなのが王女だったなんて、リブファールの連中が知ったらどんな顔をするか見てみたいぜ」

狂ったように破廉恥すぎる台詞を撒き散らす元王女に、オーガ兵までもが軽蔑の視線を投げ、儀式はいよいよクライマックスを迎えようとしていた。

それに合わせるようにジャンヌの身体も燃え上がっていく。

「グフフ。子宮までとろけさせやがって。グハア、そろそろ孕ませてやるぜ」

肉棒に感じる媚肉の感触はねつとり絡みつく蜂蜜の壺のようで、これまで犯したどんな女陰よりも素晴らしい快楽の垣塙かきづぼだった。特に柔軟性と緊縮性を兼ね備えた子宮の感触は最高で、このまま一生突っ込んだまままでいたいと思うほど。

「はああ、はあつ……はいい……孕みたい……ああ……ギドー様の赤ちゃんを……妊娠したいですわあ……ああああん。早く、早く子種を、ジャンヌの淫乱マンコに注ぎ込んで……はあああうんっ！ 熟れ熟れの卵子に、ギドー様の精をぶっかけてくださいませえっ……あ、あああ、はあああんっ」

ポッコリ盛り上がったお腹を中心にして腰をくねらせ、牡を誘う淫らなベリーダンスを舞うジャンヌ。踊り子風の衣装も、すべてがセクシーなアクセサリーとなつて、陥落の間を彩っている。

「はあああんっ！ もう……イキそうですわ……あああ……ギドー様……こ、これ以上

……我慢……ああああんっ……できませんわ……っ

熱い衝動が子宮から、もつと奥深いところからこみ上げてくる。まるで小さな爆弾を下腹部に埋め込まれてしまったように、身体全体が今にも弾け飛んでしまいそうだ。

「グフウウウッ！ 妊娠するのと同じにイクんだぞ」

腰を石臼のように回転させて、ジャンヌの子宮内を耕し、より受胎しやすい身体に仕込んでいく。

「ハアハア……はいい……きてください！ ジャンヌの卵子ぜんぶ、ギドー様に捧げますから……ああああ……きてくださいっ！ はあ、はああっ……ああむ、ギドー様の遅い子種でえ、ジャンヌの卵子を犯してくださいませえ……っ」

深く腰を落とし長大なギドーの巨根を根元まですべて呑み込む。子宮口と膣肉で勃起をギユウギユウと締めつけ、特濃精液を搾り取ろうとする。

「クウオオオッ！ とびきりの中出しで妊娠させてやるっ！ ジャンヌ、オーガの仔を……俺の仔を孕めえっ！ グウオオオオオオオオオオオッ！」

淫魔の吸精力と膣圧の極上ブレンドが、快楽神経に流れ込み射精中枢を直撃する。たっぷり精子を蓄えた陰囊が縮み上がって、ギドーの苛烈な情欲が物質化したような灼熱精液が輸精管を一気に駆け上がった。

ドバドバッ！ ドバアッ！ ドビュルルルルウウ……っ！！

「あひいいっ！ な、中に……あああっ！ 熱いの……きてますわ……っ！ あ

あああ……子宮の中でオチンポがビュクビュクしてるうっ」

胎内でペニスガポンプのように拍動し、灼熱精液をドクッドクッと吐き出す。あつと言う間に子宮は水風船のように膨らんで、紋様の浮かぶお腹もさらに膨らんだ。

「あああつ！ すごいい、いっぱい入ってくるう……んんあつ！ 精液いっぱい……わたくしの卵子にかかって……種付けされちゃうう！ ああん！」

女にとって至高の幸福の瞬間さえもが、見世物にされ、嘲笑を浴びせられている。しかも相手は異種族の牡という最悪の状況。だがそれさえも、淫魔に堕ちたジャンヌには快感を何倍にもしてくれる媚薬であった。

「あひやああん……こんなにやさしく出されてうれしい……はあはあ……ギドー様あ、もつと……

ああおお……もつとかけてください……はああんっ！ 一生懸命チンポ搾りますからあ……あおう、あああん」

濃厚生殖精液を注がれるたび子宮内でエクスタシーが爆発して、意識が飛びそうになる。逞しい牡の遺伝子を受け取る喜びで、子宮アクメの小さな波が、ずっと来っぱなしたった。

「グハハァァ！ 望みどおりぶっかけてやるっ！ お前の子宮を精液漬けにしてやるぜええっ！ オオオオウウッ！」

ドピユツ！ ドピユツ！ ドブドブドブウウウウウウウウウウウッ！！

「あつひい~~~~~んんっ！」

信じられないほどの大量のザーメンが卵子を直指して卵管を遡っていく。淫魔の超感覚

を授かったジャンヌは、子宮内の状態を目で見ているようにハッキリ感じとることができた。まっ白に濁った胎内で、数億という精子がたった一つの卵子にまとわりつき、頭をねじ込み、陵辱していく。

「フフフ。そなたらにも見せてやろう」

そしてその様子は、淫紋を通じて祭壇の上にも大きく映し出され、オーガ兵たちは身を乗り出して画面に見入る。

「オオッ。すげえ、あれがジャンヌの卵子か」

「卵子が輪姦されてるみたいだぜ！　こりゃあ、妊娠間違いなしだ」

「懐妊祝いをくれてやるっ！」

昂奮がピークに達したオーガ兵たちも射精し、夥しい白濁をジャンヌに向けてぶつかった。

ドビュッ！　ドビュッ！　ドビュッ！

バケツをひっくり返したようなザーメンシャワーを浴びせられて、たちまちジャンヌは頭の中から爪先まで、濃厚な獣精にまみれてしまう。

「ああっ、おおおうん！　こんなにいっぱい来られたらあ……ああ……絶対受精しちゃうっ！　赤ちゃんできちやうくっ！」

まるで自分自身が卵子になったような錯覚に襲われ、それが牝の悦びを爆発させた。

「ひいひいん……き、きましたわあっ！　わ、わたくしい、受精しましたわあっ！　ん



ほおお……ジャンヌの変態ドスケベ卵子が……ああああ……ギドー様の精子で受精しましたわあ~~~~っ！ あん、ああああん、あはあああんっ！」

悪魔の仔を受胎してしまったことを恍惚とした表情で宣言する。子宮の痙攣が陰洞に伝わり、さらに胴体から四肢へ、そして爪先や金髪にまで、恍惚の戦慄が伝播する。

「グオオ、ついに孕んだなジャンヌ。俺の仔を……オーガの仔を。お前は最高の牝だっ！」
天井を向くほど仰け反った唇を、ギドーにもう一度奪われた。

「ふううんっ……ギドーさま……アヒイツ……イ、イグウツ！ ああふうんっ！ イグ、イグイグウツ！ 孕みながらあ……イックウウ〜ツツ!!」

プツツシャアアアアアアアアアアアツツ！

ガクガクと上下する股間から、透明な女の潮と同時に黄金の温水も噴き上がる！

「アヒィィ——ッ！ な、なにこれえ……漏れる、漏れちゃうっ！ オシッコお……すごすぎい……あひい……死んじやう、死んじやう、死んじやう……ツツ！」

シャアアアアアアアア！ ジョロジョロジョロジョロオオオ〜ツツ！

潮吹きアクメに排尿の快感が合わさって、かつてない肉悦の超爆発が湧き起こる。常識はずれの失禁エクスタシーの津波に押し流され、完全に意識のフィラメントが焼き切れる。ジャンヌは喘ぎ、のたうち、身を振り、まさに牝としての性が、満開を迎えた風情だった。

「グフフ、子宮セックスは膀胱が圧迫されるからな。失禁アクメも覚えて、ようやく一人前のオーガの牝になったってわけだ。グハハハハハッ！」

「くう、甘い匂いで誘ってやがる」「に、妊婦のおまんこってこうなるのか」

「ああ……見られて……ますのね……はあん」

少年たちの飢えた眼差しが突き刺さるのを感じると、ゾクゾクと恍惚の震えが背筋に走る。精を欲しがる淫魔の本能が、次第に目覚めさせられていく。

（ああ……感じちやだめよ……わたくし、輪姦されちやうのに！）

それが恐怖なのか期待なのか。自分でもわからないほど心臓は乱打し、孕んだ子宮がキュンと切なく疼く。

「もう、たまんねえ。ハアハア、ぶち込んでやるっ」

最初にジャンヌの背後に立ったのは学園でもよく問題を起こす木村きむらという不良少年だった。ジャンヌも何度か言い寄られたことがあり、毛虫のように毛嫌いしていた相手だ。

「あ、ああ……き……木村くん……まって……まだ心の準備が……」

「うるせえよつ、淫売！ くらえよつ！」

獐猛な獣の勢いで覆い被さると、これまでの鬱憤を晴らすかのように、猛り立った肉棒が蜜壺に突き立てられた。垢にまみれた不潔な男根が、楔のように埋まってくる。

ジュブツ……ジュブツ……ズブズブズブツ。

「うああ……あああ……こんな……だめえ」

級友からも犯される最悪の事態に、ジャンヌの心は散り散りにかき乱される。

しかしギドーの巨根に慣らされた腔洞は楽々と木村のペニスを迎え入れ、結合が深まる

につれて増幅する快感に、溢れた花蜜がじゅわあつと溢れ出してきた。

（あああ……わたくし……とうとうみんなからも犯されて……）

墮落させられていく自分に、悲哀と戦慄を覚えるが、身体の反応はまったく反対だ。

淫魔の官能がムクムクと頭をもたげ、膣壁は巻きつくように勃起ペニスを包み込む。大きさはギドーたちには遠く及ばないが、若い精力はそれを補ってあまりあるほどだ。

「くうおお……す、すげえよ。腰が止まらないぜ。オラオラオラッ！」

ジャンヌに魅了された不良少年は、狂ったように腰を振り、妊婦の蜜壺に肉棒を抜き差しする。まるで野良犬のような高速の突き上げだ。

「はあっ……あああつ……こんな……は、激し……あああうん」

テクニクも何もない、ひたすら射精衝動剥き出しのピストンだが、それがかえってジャンヌの牝性を刺激した。火照る子宮の中で、胎児たちが嬉しそうに身を振る。

『ホシイ……ホシイ……ホシイ……ホシイ……ホシイ……ホシイ……ホシイ……』

（また……この声があ……だめえ……）

しばらく抑えていた淫魔の声が、これまでにないほどハッキリ脳内に響く。いや、それはもはやジャンヌ自身の声なのかもしれない。なかった。

「ほら、精液が欲しいんでしよう、ジャンヌ。おねだりしないとね」

「ンああつ……ああうん……き、木村君……ハアハア……出して……あああ……ジャンヌの……ンあああ……孕みマンコにい……熱いオチンポミルク……いっぱい飲ませて……」

はあつ、ああんっ！」

媚びるように肩をくねらせ、妖艶な眼差しで男心を溶けさせる。ギッチリ絡みついた淫肉が螺旋状に蠢きながらペニスを雑巾絞りに搾り取る。演技とは思えないほどのセクシーな媚態に、周りの生徒たちまで射精寸前に盛り上がる。

「うああっ！ も、もう、でるぞっ！ ハアハア、ジャンヌのマンコに、中出しだあっ！」
淫魔の吸精力に逆らえるハズもなく、不良少年は魂まで吸い込まれるような快美に目眩を覚えながら白濁をしぶかせた。

ドビユッ！ ドプッ！ ドビユルルウウッ！

「んああ……出されてる……オマンコにい……ああ……ッ！」

妊娠してますます敏感になった膣奥に、級友のザーメンがべつとり粘りつく。子宮がヒクヒク痙攣して、新鮮な牡の精気とともに精液を啜り飲んでいく。

「うあああ、そんな……イクッ！ ああ……イクウ……ッ！」

理性を追い越して、肉体は吸精の快楽に焼き尽くされる。急激なオルガスムスの到来に背筋をピーンと伸ばした。

「ハア……ハア……あああ……熱い……うううん」

膣内に粘る温もりが、魂を腐敗させる自堕落な歓喜を呼ぶ。肉体的な快感はそこまででもなかったのだが、精を注がれるだけで絶頂してしまうほどに天使姫の内面は淫魔化してしまっていたのだ。

「ふうう……ハアハア……スツゲエ気持ちよすぎて……最高だったぜ、ジャンヌ。はあはあ
あつ」

ペニスを抜き取ったあと、不良少年はポケットから取り出した油性ペンでジャンヌの太腿に『精液便所』と落書きし、お腹に正の字の一画目を書き込んだ。

「へへへ、コイツはいいや。つ、次はボクの番だ」

メガネの太った少年が入れ替わりでジャンヌの前に立つ。女生徒の盗撮をしているなど、よくない噂の生徒だ。監禁されていたのになぜか肥満体型は維持している。

「あ、あ……金田君……ハアハア……おねがい……少しやすませて……ハアハア……」

「ウヒヒ。今さらおあずけなんてできないよおつ」

金田のペニスは身体の割りには小さめで、真性の包茎だった。包皮を突っ張らせた異形の肉棒が、ジャンヌの中に有無を言わせず沈んでくる。

「はああ……敏感になって……あああ……ビクビクしちゃうっ」

吸精絶頂直後の過敏な粘膜を貫かれて、ジャンヌはヒイッと喉を反らした。電極棒を突っ込まれたように、快樂の紫電が胎内に走り抜ける。

「ハアハア、ボク、リアルの人、初めてなんだ。こんなに気持ちいいなんて」

「あつ、あああん……そんなに動いちゃ……だめえ……アアン……感じちゃうっ！」

グイッと押し入れられ、他人の体温が粘膜に染み込む。異物感が溶けて、やがて甘美なる一体感へと変わっていく。

「エへへ、記念撮影しようね、ジャンヌちゃん。ハアハア」

金田は腰を振りながら、携帯のカメラで撮影を始めた。正常位でのハメ撮りは美貌を真正面から捉えている。

パシャ！ パシャ！ パシャ！ パシャ！

「はああうっ……いやあ……ンあっ、恥ずかしい……あむっ……こんなところ、撮らないでえ……あああうん……いや、いやあんっ」

ストロボの閃光が瞬くたび、激烈な羞恥で全身の血液が沸騰する。死ぬほど恥ずかしいのに、理性がだんだん麻痺して、ジャンヌは異様な昂奮状態にのめり込んでいく。

「ボクのカメラで悦んでくれて嬉しいよ。ネットにも公開してあげるからねえッ」

「ンあああ……そんなあ……あああん」

この惨めなポテ腹姿をネットで晒し者にされてしまう。想像しただけで被虐の情感が燃え上がり、子宮がキュンツと縮み上がる。腰がうねるたび、臨月のポテ腹がユサユサとダイナミックに揺れた。

「くう、もう待ちきれねえ。俺は口を使わせてもらうぞ」

三人目は赤谷^{あかたに}。もともと痩せた少年だったが、監禁生活でさらに骨と皮だけに痩せて、まるでミイラのようなようだ。それでもペニスだけは元気で、身体中の生命力がその一点に集中しているかのよう。

「ンああ……赤谷くうん……むぐぐう……あむうん」

膾^すえた臭いを放つ男根が口腔を占拠する。風呂にも入っていないペニスは強烈な異臭を放ち、ツーンと鼻が痛くなつて涙が滲むほど。

(アア……オチンポ……ホシイ……ザーメン……ホシイ……)

嫌悪感を抱いたのは初めだけ。すぐに淫魔の本能が上回り、ジャンヌは舌をねっとり絡めて勃起を磨いていく。もう自分がなにをしているのかもわからないほど、混乱させられていく。

「チンカスがとれてきれいになつていくな。へへへ、美味しいかよ？」

「んちゅ……むふっ……チンカスウ……ぴちゃぴちゃっ……ハアハア、おいひいれす……ああん……れろつれろおっ！」

痴垢が独特の塩辛い味をばらまきながら舌の上に落ちてくる。それを唾液をよく混ぜて、こくりこくりと呑み込んでいく。うつとりとした笑みまで浮かべて。

(美味しくくない……嬉しくなんかないのに……お口がとまんないっ)

時折僅かに残つた理性が悲鳴を上げる。しかしそれも長くは続かない。津波のように後から後から押し寄せる淫魔の快楽に脳が洗われ、人としての価値観や尊厳も失われてしま

う。
「はあっ、あああ……やめへ……オチンポ……んちゅっ……くちゅばっ……もうゆるしへえ……はああん」

オズオズと腰が動き始め、クチュクチュと淫靡な水音が漏れ始める。いやと言いながら

痴女のような淫蕩さを見せつけられて、男子たちは息を呑んで見入っていた。

「ハアア、いい表情だよお、ジャンヌちゃん……た、たまらないよお。もつと深くくわえて、ジュボジュボしてごらんよ」

A Vの監督になったような気分で、パシャパシャと狂ったようにフラッシュを浴びせる金田。

「あ、あ……写真はいやあ……はむうっ……撮られてるう……はあん……撮らないれ……ジャンヌのチンポ顔お……あああん……撮っちゃラめえ……じゅぽっ、じゅぽあ、んふうんっ！」

ひよつとこのように唇を突き出す無様なフェラ顔をカメラと衆目に晒しながら、ジャンヌは無我夢中で若竿を舐めしゃぶる。頬をくぼませてズズツと強烈にバキュームすると、赤谷はあっさりと陥落してしまう。

「くうああつ！ チンポが溶けそうだぜ……も、もうダメだつ！ 出るっ！」

ドビュツ！ ドビュツ！ ドビュウウツ！

「んぐっ……むふっ……あふうんっ！ みりゆくう……あふっ、ごきゅっ……ごくんっ」

注がれる精液を、こぼさず飲み干していくジャンヌ。どんなにイヤだと思っても、身体はもう淫魔そのものに墮落して、精液を貪ってしまうのを止められない。

「はあ……はあああ……もう……飲ませないれ……こく、こくんっ……精液……飲みたくないのお……ああん」

喘ぐ唇に、ぬめつく舌に、白濁の糸がドロツと粘る。恍惚とした表情は、悦んで飲んでいるようにしか見えない。

「くうっ！ その顔、たまらないよおっ！」

同級生とは思えない妖艶な色香に引き込まれ、カメラ少年も膣内にドツと射精する。

「はああうううんっ！ また、熱いの出されてえっ！ ああああ……感じちゃう……オマンコ……イク……またイクうううっ！」

ビクンビクンツと全身を痙攣させ、突つ張る爪先が内側に反り返る。吸精の法悦の前には、理性も常識もまったく役に立たず、ジャンヌは連続絶頂に追い上げられてしまう。

「ふうあ……あああ……はあはあ……はあうん」

五分も経たないうちに三人を射精させ、気怠い余韻に四肢をクタリと弛緩させた。その身体にさらに『牝豚』という淫語と正の字の二画が書き足される。

（ああ……で、でも……）

オルガは極めているものの、どこか物足りなく、肉体はさらなる精を求めて疼き続けている。精を求め続ける子宮は満足していなかった。

「さすがジャンヌ。いいペースだね。でもジャンヌはまだまだ満足してないみたい。やっぱり妊娠すると人間の精液じゃ足りないのかな」

「そ、そんなこと……も、もう……休ませて」

ミハルの言葉を否定できなかった。エクスタシーの波が引いても、もどかしいような切

なさ、焦れつたさがずっとお腹の底に残っている。

胎児は精気を吸って驚異的な速さで成長しており、大量の精液を必要とする。それがジャンヌの淫魔の能力をさらに強めているのだろう。連続絶頂で疲弊しているのに、媚肉だけは牡精を求めてヒクヒク蠢いていた。

「まだ十人以上いるんだから休ませるわけないでしょ。もっと精液を注ぎ込んでもらうんだよ。みんなのために……そしてジャンヌの赤ちゃんのためにもね」

「うああ……あ、赤ちゃんの……ため……」

ボテ腹を優しく撫で回してジャンヌの母性を刺激してくる。女にとって母性は最も強い本能の一つだ。それを絡めて迫られては、ますます逆らえなくなってしまう。

「それにジャンヌ自身も欲しがってるじゃない」

「あ、ああ……ミハル……やめて……」

肩越しに伸ばした両手の中指と人差し指で、膣穴をグイッと左右に引き裂く。

「ほおら、こんなにとろつとろ！」

「はあああ……♥」

ぽっかり口を開けた膣口の中、緋色の粘膜の層が剥き出しになる。蜜壺には、愛液と射込まれたザーメンが澱のように溜まって、生々しい牝牡の性臭を立ち上らせる。

「うおお……すげえ、子宮まで丸見えだぜ」

「あの奥にオーガの赤ん坊がいるのか。くううっ！ たまんねえよ」

ミハルの狙いどおり若い性欲をますます刺激され、男子たちはハイエナの群れのようにジャンヌに襲いかかった。

「もつと股を開けよ」「ほら、手も使え！」

「きゃああん！ そんな、同時にい……あああむ」

蜜穴はもちろん唇にもペニスガズブリと衝き込まれ、さらに両手にも灼熱の肉棒が握られる。

「俺は髪を使わせてもらおうか」

それだけでは足りず、金髪にも何本も肉棒が擦りつけられた。城嶋からも褒められた品のあるブロンドを、性玩具に貶められるのはあまりにも惨めすぎる。しかしその屈辱までもが、倒錯の情欲を燃え上がらせ、天使の姫をさらなる被虐の迷宮へ引きずり込む。

「んぐぐつ……むうつ……はあむうん……や、やめへえ……ああん、んぐつ、んぐうつ」

壮絶に輪姦されながらも、ジャンヌの身体は牝の悦びにプルプルと打ち震えていた。

肌という肌が、牡の精気を感じとって歓喜に粟立つ。噴き出す汗がローションオイルのように妖しく輝き、擦りつけられるペニスの滑りをよくしていく。輪を作った手指が忙しく前後して陰茎を扱き、唇は龟头を食道まで迎えるディープスロットで奉仕する。

「くうおつ……な、なんでこんなに気持ちがいいんだ……ハアハア」

「うそだろ……もう……で、出ちまうぞ……クオオッ！ ボテ腹に、ぶっかけてやるっ！」

ブシャッ！ ドバッ！ ドバドバドバアッ！

挿入して一分もたずに、少年たちは白濁をしぶかせてしまう。膣内はもちろん、顔面やプロントにも濃厚な精液がぶっかけられた。

「んぐぐぐううううっ！ らめえ……イクツ、イっちゃううううっ！ うあああん」

大量のザーメンシャワーを浴びせられ、子宮に注ぎ込まれ、ジャンヌも激しいアクメの渦に呑み込まれる。もうどこで感じて何回イったのかもわからなくなってきた。

「おいおい、だらしな過ぎ、お前ら」「俺は尻をやってやるぜ！」

正の字を書き込んだ少年が離れると、すぐさま入れ替わりで次の男子たちが襲いかかる。

「あ、あああ……お願い……ハアハア……休ませて……す、少しいいからあ……ひあ、あああっ！」

懇願しても暴走する少年たちが止まるわけもなく、次々に肉棒が突き立てられた。さらにあぶれた少年たちは、自分の男根を片手で扱きながら、ジャンヌの乳房や太腿に手を這わせてくる。

「んふうっ……むうあ……あああ……あううう」

飛び散った精液でパツクするように肌に塗り込まれて、ジャンヌは身重の身体を悶えさせ、のたうった。

（ああ……くるう……くるつつちゃうっ）

乳房が揉まれ、乳首が引つ張られ、首筋やうなじをくすぐられ、お臍をほじくられ、クリトリスを捏ね回され……全身の性感帯を同時に責められ輪姦されていく。

「ひうつ……んむつ……ひんじやう……うぐつ……ゆるし……んぐうつ」

身体中から絶え間なく送り込まれる快樂信号で、脳が灼け、神経回路がショートする。淫靡化した肉体の感度がよすぎて、頭がパニック状態に追い込まれた。

「おらあつ、結婚祝いだ。くらえっ！」

「この便所妊婦め！ ザーメン潰けにしてやる！」

ドバドバドバアアッ！

「うあああつ……イ、イクうつ……もう……イきたくないのに……いつちやううつ！」

精液の熱さや匂いに、五感のすべてが感じてしまう。自分で自分を制御できなくなり、絶頂感がいつまでも継続し、登り詰めたまま降りてこられなくなる。そんな性の極限を味わわれながらも、ジャンヌは腰を振り、浅ましい牝のヨガリ声を噴き上げ始めた。

（ああ……わ、わたくし……みんなのために……世界のために頑張ってきたのに……）

絶望に心を染められていくにつれて、どす黒い快感がどんどん大きくなる。もう自分は完全な淫魔で、心も身体もすべてがセックスのためだけにあるような気がしてきた。

「ンああ……死んじやう……あむン……くちゅ、ちゅばあ……あああ」

腰を振るだけでなく、手も足も使って男根に奉仕していく。金髪までもがジャンヌの意思でペニスに巻きつくようだった。そんなあられもない姿が、男子生徒たちを淫樂の園へ誘う。

「くっそ、搾られて……もうダメだ！」「ハアハア……お、俺も……出るぞっ！」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!

二次元
ドリームマガジン
DREAM MAGAZINE

催眠
催眠すれば絶対買える!
催眠ソフトプレゼント!!

偶数月
17日発売

990 yen vol.72 2013 10

二次元 ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

COMIC
UNREAL
UNREAL

10 2013 OCTOBER
定価680yen
魔法少女アフレカ
志保を全員リベス

魔法少女カナタS
提督
でましたか?

発射準備は
できましたか?

奇数月
12日発売

18

COMIC UNREAL

KTCといえば闘うヒロインアンソ!

MEGAMI
CRISIS
Vol.13
chaccu

メガミ
クライシス

TS魔法少女か抱と共に闘む!
マウカレ魔法少女!
chaccu
原作:コトキエ

奇数月
下旬発売

今号でラスト!&
今秋リニエール!
詳しくは
本誌の中身を
チェックしてね!

MEGAMI CRISIS メガミ クライシス

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。